
炎の帝王 FLARE EMPEROR second

霊宮空刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の帝王 FLARE EMPEROR second

【Nコード】

N9958X

【作者名】

霊宮空刀

【あらすじ】

彼の物語・・・「短気」 「天才のような才能」 「それゆえの孤独」の物語・・・

彼は『短気』で『天才の様な才能』と『それゆえの孤独』の三つがある。今回はこの中の一つの『短気』について語ろう。彼が16歳の頃の話である

「俺って……最低だな」

彼は、ただ、机を捨てられたことだけで怒りを表してしまい、それで仮にもクラスの仲間を殺したことに罪悪感を感じていた。そして彼の目の前には不器用に組み上げられた十字架があった。これは彼なりの弔いを表しているのである。彼の目からは涙が流れていた。このころはまだ短気ではなく、一人の人間としての思考を持っていた。彼は立ち上がると、炎の翼を生やし、空へと飛び立っていった。

「俺は……もう……戦いたくない」

もう彼の眼には、生きる気力など残っていなかった。人形のようにハイライトの無い瞳で、下の街の喧騒を眺めていた。そこに何かを見いだしたのか、静かに下りて行った。彼の降りた先には能力者集団がない安全地帯と呼ばれるところに居た。ここで彼は一生過ごすつもりであろう。そしてその場所まで静かに歩みを進めていった。おぼつかなく、自信なげな足取りで。

「……………」

そんなことから一カ月たったある日、彼が居座る場所に足を踏み入れた者たちがいた。街でも有数の能力者集団が無断で入り込んで当たりのものを目につく限りで破壊していった。彼はそれに気づいて

いながらも、後悔をずっとしていたために戦おうとせずに死のうと
していた。そんな時、彼の脳裏に一つの言葉が走る

『戦えないのなら、戦えるように』

その次の言葉は、とてつもなく、彼の今の状態全てを破壊できる言
葉だった。それと同時に、彼の口も開いていく

「『常に怒りに身を任せればいい。後悔しないように』」

「なんだ・・・最初からこうすればよかったんじゃないか・・・
最初からこうすりゃよかったのかよ・・・何で気付かなかったんだ
ろっつ、なあ！！！」

彼は周りにあるものを蹴り落とすと、荒々しく歩き、能力者集団の
目の前に立つ。そして、炎の翼を左に三枚、右にも三枚生やすと、
右手に炎の鎌を持ち、無造作に薙ぎ払う。全て避けられてしまうが
彼はそれを笑いながら見る

「おい・・・誰が避けていいっていったんだあ？ああ？」

彼は火球を能力者集団の横に向けて投げだすと、自分も接近して炎
の鎌で殴り倒す。その表情は笑っていた。これが彼の本性『短気』
であった。そして炎の拳で一人を殴り倒すと、自分の拳にまとった
炎に息を吹きかける

「無制限バトルロワイアル・・・誰が残るかなあ？」

「黙れ！！！！俺たちに逆らうな！！！！」

一人の少年が竜巻で襲ってくるが、それを難なくかわすと周りもろとも火柱で燃やしつくす。風使いは上空に居て無事だった。それを睨みつけながら彼は炎の弓を作り出すと上に向けて何本も矢を放つ。そして自分だけの頭上に盾を作り出すと、口笛を吹きながら笑い、どこからか煙草を取り出して、火をつけてから吸い始める

「手前！！舐めてるのかよ！！！」

「余裕こいてるんじゃないやねえよ！！！」

彼はあきれた目で周りを見ると、同時に上を指差しながら

「あの炎の弓から放たれた矢は、いつここに落ちるでしょうか？正解は」

彼はそういうと、頭上にある炎の盾に『鉄壁』の属性をふかしながら言った

「あと3秒後かな？」

彼がそう言うと同時に数十本、数百本という炎の矢が降り注ぎ、なすすべなく次々と能力者たちが刺さって行った。と同時に絶命した。彼だけは炎の盾で無事だったが他の能力者はどんな能力で防御しようとしても貫かれ、回避しようとしても回避したところに矢が降り注ぎ、彼の周りに行つて逃げようとしても彼がそれを許さずに炎で焼き殺す。それから数分後、彼の周りには灰と死体が転がっていて、さっきまでの凄惨な光景を教えていた。彼は死体を踏みつけるように歩くと、出口から外へと出る。夕焼けがもう始まっていて、綺麗だった

「もうこんな時間かよ・・・始末するのに何分もかかった。ま、いっか。楽しかったしな」

彼は変わった。短気になり、人として違うものへと変わってしまったのか・・・しかし、彼はまた悩むことになる。『天才のような才能』と『それゆえの孤独』を思い知ってしまったから

『天才のような才能』 彼が6歳の頃

彼は生まれながらの天才・・・だった。しかし、それはあくまでも制御での話であり、それ以外の、造形や遠隔操作などの才能は無に等しかった。彼の弟は、同じ炎の属性を持ちながら彼と違って、能力を発現したところから制御・造形・遠隔操作などの才能が彼よりうまかった。親はそんな劣等な兄よりも優秀な弟を選び、その日から彼に対する虐待が始まった。殴られることなど日常茶飯事、ご飯を一日抜かれるのなど1週間に2〜3回ほど。ひどい時には煙草の灰皿で殴られたり、弟の実験台になって身を焼かれるような思いをしてきたこともある。そして、ある日に絶望に突き落とされた

「貴方はもういない、××」

「お前みたいな役立たずはうちの息子ではない。××」

「クソ兄貴みたいなカス、世界のどこにもいないね」

そして、彼の家族は彼を残して目の前から去ってしまった。彼は泣いた、ずっと泣いていた。それに気付いた近所の人間が通報して、彼は保護される形で児童施設へと入った。彼は気づいた。

「僕が落ちこぼれだから捨てられたんだ・・・天才になれば認めてくれるはずだ」

そして毎日のように練習を始めた。制御をさらに出来るようにし、造形を一からやり直して様々な形に瞬時に構築できるように練習し、遠隔操作を物にしようとした。この練習を知る者はだれも居なかったが、ただ一人知っていた物がいた。それは氷の能力者の女の子で、銀の髪が目立つ可愛い子だった

「ねえ？何でそんなにぼろぼろになるまでするの？」

「僕が落ちこぼれだからだよ……」

その日から女の子は練習を眺めているようになり、時々指摘するようになった。たとえば

「そこは、命じるような形じゃなくて、お願いするような形ですればその形に炎はなってくれるかもよ」

「そこはね……音楽を指揮するような感じでやってみたら？」

女の子のアドバイスを受けて彼はだんだんと才能を開花させていった。そして、女の子は里親に引き取られた。少年は親などもう気にしなくなり、女の子を意識するようになっていった。これは恋というものだ気づくのは、13年後のことである。しかし、あるときに『頑張れ』という言葉を知ったときから努力したことを隠すようになった。普通なら知られてほしいはずだが、彼は何故かそれを好まなかった

「何でそんなにうまいのに何もしないでそこまでいけるんだ？」

「生まれながらの才能だよ。お前と違ってな」

そうやって言ってくるものを生まれながらの才能と言って偽りながら、彼は生きていく。『頑張れ』は一方的な重圧をかけられる。『努力した』は自己暗示だった。どちらも彼は嫌っていた。だから、知られずに細々と練習をしていた。彼はいつしか親がいたことを忘れていた。そして、レベルサードとなつて二重能力に目覚めたときに、再び親がやってきた

「御免なさい・・・謝るからまた一緒に暮らしましょう？」

「父さんが悪かった。だからこの通りだ、許してくれ」

彼はそのうわべだけの謝罪をはねのけた。

「許すわけねえだろうが！！あんたらは俺のことを役立たず、落ちこぼれと罵倒してきた。傷だつてつけてきた。自分の子供のくせにだ！！そんなこと許すわけねえだろうが！！だから・・・目の前から失せるおオオ！！！！！！！！」

彼は自分の後ろから炎の竜を作り出し、威嚇する。親のほうはおびえたのか足をもつれさせながら逃げて行った。彼は炎の竜を消すと空を見上げて呟く

「家族なんかいらねえ、信用できる奴なんていない。この世に自分以外で信用できる奴なんて誰も居ないんだ」

彼はその言葉の通りに、誰も信じないで自分だけを信じていくようになった。しかし、彼はそういう生き方をしながらも、ある一人の人間を信頼するようになった。しかし、その人間に起こった悲劇のせいで、自分と少年以外の能力者を信用しなくなってしまった

『それゆえの孤独』を知るものに出会って 彼が14歳の頃

「何だよ・・・お前」

「俺は鎌崎要人。お前と同じ炎使だよ」

鎌崎要人は天才だった。しかし、それゆえか友達などいずに、誰からも信用されなかった。誰かの悪口がほかのクラスから出たら要人のせい、クラス内でトラブルが起きたら要人のせい、クラス内で物が無くなったら要人のせいと言う風にだ。それを要人は否定もせず、に罰を受けた。それに怒りを表すこともせず、ただ耐えていた人間だった

「んで、俺に何の用だ？」

「いや、みんなから『お前なんか来るな!!! 空気が穢れる』とか、『お前なんかいないほうがまし』とか言われてくるのが教室だとあって・・・だから君のところに来ただけど・・・迷惑だったら別のところ行くけど」

「・・・いいぜ、これからここで食べばいいじゃん」

彼は、この要人に同情したのかわからないが、この出来事からずっと一緒に食べるようになった。やがて、彼は要人だけなら信じてもいいかな? と思いつながら暮らし始めたときに、要人からある一言が告げられる

「友達に、ならない? いや、ゲイとかホモとかそついう系じゃないよ」

「いいぜ！！今日からお前と俺は友達だ！」

彼に初めての友達、鎌崎要人が友達となった。しかし、その幸せは長くは続かなかった。要人を妬んだクラスの人々によって、深夜の屋上に呼び出されたのだ

「なんだい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「黙ってちゃ分からないけど」

「死ね」

「まってよ」「お前なんか無駄なだけだ」が・・・・は・・・・」

そして、心臓に迷わず刺さったナイフが、鎌崎要人の命を奪った。そして、死体は放置されて、次の日に彼によって見つかった。

「か・・・・な・・・・と・・・・？どついうこ・・・・と・・・・だよ・・・・？まさか・・・・あいつら・・・・が？」

要人はもうすでに冷たい身体になり、二度と笑わない顔を見つめながら、彼はその身体に火をつけた。一見すると19歳の彼のように殺した者を証拠隠滅のために消しているのかと思っただが、火を付けた後、ずっと祈っていた。

「要人・・・・安らかに眠ってくれ・・・・」

この日から、彼は何も信じなくなった。能力者を。

（後書き）

彼「みてくれた人がいたらありがとう。だが・・・」

霊宮「それゆえの孤独が完全に違うものになったね」

彼「反省点だな」

霊宮「次回は頑張ろう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9958x/>

炎の帝王 F L A R E E M P E R O R s e c o n d

2011年11月16日16時00分発行